

氏名	阪 口 直 樹
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第3498号
学位授与年月日	平成10年 9 月30日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	十五年戦争期の中国文学 —国民党系文化潮流の視角から
論文審査委員	主 査 教 授 齋藤 茂 副主査 教 授 山口 久和 副主査 教 授 中村 圭爾

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は序章と終章を合わせて十二の章から成っている。また第一章から第三章、第四章から第六章、第七章から第十章が、それぞれ三つの纏まりを成している。各章の配列は通時的であり、本論文の「方法」を総論的に提示した序章に続き、第一～三章では1930年代の様々な「国民党系文化潮流」について取り上げ、第四～六章では「国防文学論争」に焦点を当て、さらに第七～十章では文学地理的な立場から問題点を取り上げている。そして終章ではとくに胡適の立場から、国民党の文化面における保守性を取り上げ、序章と合わせて国民党の二面性と複雑性を明らかにしている。以下、各章の要点を記す。

序章の〈十五年戦争期中国文学と国民党〉では、本論文で取り上げる問題点と筆者の立場とを明らかにしている。本論文では、従来の中国現代文学史の多くが陥っている問題点を是正するために、国民党系知識人の文化活動と「左連」系の作家の活動とを同等に見て全体をとらえ直し、「左連中心史観」を打破しようと試みており、本章でその具体的な方法等を述べている。

第一章の〈三〇年代初期の「民族主義文学運動」〉では、国民党の「民族主義文学運動」について、国民党の派閥（組織部と宣伝部）的要素と、文学地理的要素の二つの視角から分析を加えている。

第二章の〈『子夜』における買弁の意味〉では、茅盾の代表作である『子夜』を取り上げ、この小説が果たした役割を、中国における資本主義のあり方の検討を通じて再評価している。

第三章の〈「中国本位的文化建設宣言」をめぐる〉では、35年1月10日に上海で発表された「中国本位的文化建設宣言」について、その背景や意義について論じている。

第四章の〈茅盾と「文芸工作者宣言」〉では、「中国文芸工作者宣言」に関する諸説を検討し、この宣言と茅盾との関係を明らかにすることを試みている。

第五章の〈『文学』と茅盾——「国防文学論争」に関わって〉では、前章に引き続いて、茅盾の「国防文学論争」における複雑な対応の仕方をめぐって、雑誌『文学』掲載の文章を通じて分析を試みている。

第六章の〈初期「国防文学論争」における徐懋庸の位置〉では、魯迅が批判したことによって、従来低い評価しか与えられてこなかった徐懋庸が、初期の「国防文学論争」において重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。

第七章の〈武漢における「民族主義文学運動」の展開〉では、抗戦時期に文学運動の拠点となっていた武漢の状況を、とくに「民族主義文学運動」の展開という見地から検討し、武漢在住の作家の活動が、やがて「文協」の設立に繋がっていったことを明らかにしている。

第八章の〈『腐蝕』の背景——茅盾と国民党「特務組織」〉では、茅盾の代表作『腐蝕』の主人公の性格付けを検討することを通じて、この小説の構造を解明している。

第九章の〈重慶時期の国民党文化政策と劉百閔の出版活動〉では、国民党の「確定文化政策案」の具体化の一環として行われた出版活動を取り上げ、劉百閔が社長をしていた「中国文化服務社」の出版活動が国民党の体外特務組織の活動とも密接に関係していたことを明らかにしている。

第十章の〈「戦国派」の文学と文化論をめぐる〉では、40年代初期に昆明で誕生した「戦国派」の文学と文化論について論じ、これも抗戦時期の「文化ナショナリズム」の潮流の一環として位置付けるべきであると結論づけている。

終章の〈国民党文化政策の展開と胡適〉では、胡適と国民党の関係を具体的に分析し、その親近性にのみ着目していた従来の観点とは異なって、「コスモポリタン」の胡適と「民族的・保守的」な国民党との鋭い対立に注目して、その関係を再検討している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国現代文学史研究の新たな方法として、「十五年戦争期」という通時的な捉え方を提起し、また国民党系の文化潮流からの視角の重要性を唱えて、「左翼作家連盟」を中心とした従来の研究の欠点を補おうと試みたものである。全体は十二章からなり、さらに大きく三編に構成されている。第一編では1930年代に見られる幾つかの「国民党系文化潮流」を個別的に取り上げ、第二編では「国防文学論争」に焦点を当て、第三編では国民党の拠点となった武漢、重慶、昆明を文化地理的に取り扱っている。

第一編では「民族主義文化運動」や「中国本位的文化建設宣言」などに関わる問題点を取り上げ、意義や影響などを論じるが、ここでは従来の研究では扱われなかった、歴史、経済関係の資料や、個人の経歴などの資料にも言及して、幅広い角度からの検討を試みている点が評価される。

第二編は「国防文学論争」に関わる問題点を取り上げるが、ここではとくに論争をめぐる人間関係について詳しく検討し、これを鮮明に表した功績は高く評価される。

第三編は国民党の活動を文学地理的観点から再検討しているが、とくに武漢での状況を明らかにしたのは初めての試みであり、注目される。また出版社の活動の実態を明らかにしたり、昆明での活動に対する新たな視点を提起した点も、高く評価できる。

本論文は大きく三つの柱から構成されるため、一見すると問題が多岐にわたっている印象を与えるが、国民党系の文化潮流を中心に据えつつ、当時の代表作家、評論家の活動実態や、主要な作品の分析に及ぶその構想には、いささかの揺るぎも無い。そして本論文で提起された、「十五年戦争期」という長いスパンでの現代文学史の再検討という視点と、「左連中心史観」を打破して、国民党の活動も含めた全般的な再評価を試みる点は、大きな功績として評価される。本書で掘り起こされた貴重な資料も少なくない。今後さらに多くの資料を取り入れて、地方での文学活動をより詳細に検討することによって、本論文が目指した新たな文学史の構築が、より具体的になるものと期待される。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。